

# ハイブリッド方式の大学ダンス授業における 簡易的な e ポートフォリオ活用に関する試験的試み

谷 本 英 彰

## A Pilot Study about Effective Use of Brief Version E-portfolios in University Dance Class Mixed Methods using Online and Face to Face

TANIMOTO Hideaki<sup>†</sup>

### 概 要

本学スポーツ健康学部で開講されている実技科目「ダンス1」において、ハイブリッド方式の授業を実施する際に対面方式の授業で活用される紙媒体のポートフォリオに加えて、簡易的な e ポートフォリオを用い、通例用いられてきた紙媒体のポートフォリオと同等の効果をもたらすかどうかを検討した。

検討の結果、ポートフォリオの役立ち度合いや学習の振り返り機会について、簡易的な e ポートフォリオと紙媒体のポートフォリオとの間に差異は認められなかったことから、ハイブリッド方式授業における簡易的な e ポートフォリオの活用は有用である可能性が示唆された。

キーワード：学習記録，大福帳，オンライン授業

### 目 的

本研究では、本学スポーツ健康学部で開講されている実技科目「ダンス1」において、ハイブリッド方式の授業を実施する際に、対面方式の授業で活用される紙媒体のポートフォリオに加えて、簡易的な e ポートフォリオを作成し、この簡易的な e ポートフォリオが紙媒体のポートフォリオと同等の効果をもたらすかどうかを検討することを目的とした。

---

<sup>†</sup> 大阪産業大学 スポーツ健康学部スポーツ健康学科講師

草 稿 提 出 日 11月8日

最 終 原 稿 提 出 日 11月15日

ポートフォリオとは、文部科学省（2008）によると、学生が、学習過程ならびに各種の学習成果（例えば、学習目標・学習計画表とチェックシート、課題達成のために収集した資料や遂行状況、レポート、成績単位取得表など）を長期にわたって収集し、それらを必要に応じて系統的に選択し、学習過程を含めて到達度を評価し、次に取り組むべき課題をみつけてステップアップを図っていくことを目的としたものである。このポートフォリオを大学教育場で活用した研究は、すでに多く実践されており、受講生に学びのプロセスを自覚されることができる（村石・土井，2021；李，2018），受講生の学習意欲が向上する（松井，2021；宮原，2021；松本，2018；立田，2017；吉重，2016），自己分析を促す（松井，2021；宮原，2021），受講生同士の共同学習が促進される（李，2018），教員とのコミュニケーションが促進される（李，2018；吉重，2016）などの効果が報告されている。

また、これらポートフォリオが電子化され、eポートフォリオとして様々な大学で導入され、そのシステムの改良も行われている（例えば、山田，2019）。本学においても、教職履修カルテなどのような形でeポートフォリオは部分的に教育活動の中で利用されている。しかし、日常的に実施されている授業にて活用できるようなeポートフォリオは存在しない。2020年度より新型コロナウイルス感染拡大防止の観点から、大学内への入構制限が実施され、大学での授業はオンライン方式やオンデマンド方式等の非対面方式の授業が多く実施されるようになった。2021年度は授業運用レベルが緩和され、ある程度は対面方式にて授業を実施することが可能となったが、全て受講生を対象に対面方式で授業を実施することは困難であるため、非対面方式と対面方式のハイブリッド方式にて授業を実施している状態である。そのため、これまでのような電子化されていない、主に紙媒体のポートフォリオを活用するのが困難となった。

しかし、上述したように本学には授業で活用できるようなeポートフォリオシステムは存在しない。その代わりにLearning Management SystemとしてWebClassが導入されている。WebClassでは、課題の提出やメッセージのやりとりなど、受講者と授業者間で、ある程度の意思疎通を行うことは可能であるが、これまでの学習過程を振り返り、次に取り組むべき課題をみつけてステップアップを図っていくことを目的として履歴を残すような仕様になってはいない。

そこで、本研究では、簡易的なeポートフォリオを作成し、オンライン方式の授業に参加する受講生を対象に活用し、対面方式の授業で活用している紙媒体のポートフォリオと同等の効果を得ることができるかを試験的に確認することを目的とし、ハイブリッド方式の授業において受講生の学びを支援するためのポートフォリオ活用に関する一助とすることとした。

## 方 法

### 1. 調査対象

本学スポーツ健康学部で開講されている専門教育科目の1つである「ダンス1」を受講した学生95名のうち調査票にもれなく記入した84名(男子52名, 女子32名)を分析対象とした。なお, 本科目は4クラスに分けて授業を実施した。各クラスの受講者数は最も少ないクラス15名, 最も多いクラスが34名であった。

### 2. 調査方法および調査時期

調査は, 2021年7月下旬に実施され, 対面式の授業参加者に対しては, 授業担当教員が調査票を配布・回収した。一方, オンライン式の授業参加者についてはGoogle社が提供するアンケートフォームサービスであるGoogleフォームを用いて調査を実施した。なお, 倫理的配慮に関して, 研究の目的の説明および得られたデータを集計以外に用いることはなく, プライバシーが保護されていること, 調査への回答は自由意志であり, いつでも回答を中止できることを調査票またはGoogleフォーム上に明記した。

### 3. 授業の概要

本科目は, 学科必修科目であるとともに教職必修科目として位置づけられており, ダンスの基礎的・基本的な知識・技能の習得, ダンスの創作方法および創作ダンスの指導法を中心とする内容で構成されている。

授業は, 対面方式とオンライン方式を同時に実施するハイブリッド方式で実施した。当時の学内における授業運用状況は, 本科目のような実技授業に関しては「原則として対面受講」であったが, 実習・演習室の収容人数などの事情により, 対面受講に人数制限し同時双方向オンライン受講と併用する(ハイブリッド方式授業)または同時双方向オンライン受講のみとする場合もあるという形であった。「原則として対面受講」とされていたものの, 新型コロナウイルス感染症拡大防止に関わる緊急事態宣言が発出されている状況下であったことも踏まえ, 受講生が自身の状況に応じて授業に参加できるよう対面方式とオンライン方式の授業を同時開講した。このような方式を採用したため, 毎回対面方式の授業に参加する受講生, 毎回オンライン方式の授業に参加する受講生, 対面方式で参加することもあれば, オンライン方式の授業に参加することもある受講生など受講の方法は受講生によって様々であった。

オンライン方式の授業については, オンライン会議ツールの1つであるZOOMを利用

した。授業内容および授業時の展開については対面方式、オンライン方式のどちらの方式で参加していてもほぼ同一になるようにした。すなわち、課題の設定および把握の後、課題に関する基礎的・基本的な技能の習得に関する活動を実施し、その後、グループに分かれて課題に関する創作活動を行い、互いの作品の発表と鑑賞という流れで進められた。創作グループは対面方式の授業の場合、概ね5 - 6名で構成したが、オンライン方式の授業についてはZOOMをスマートフォンで利用した場合、画面上に配置できるのは最大4人であるという画面特性を考慮して3 - 4名で創作グループを構成した。また、受講生が多くの方と触れ合う機会をつくるために創作グループは課題が変更されるたびに再編成された。

#### 4. ポートフォリオ (学習記録カード)

この授業は、対面方式とオンライン方式を同時に実施するハイブリッド方式で実施されたため、各方式に適した形でポートフォリオ記入シートを準備した。

対面方式の授業に関しては、学習記録カードと称したポートフォリオ用紙を準備した(写真1)。学習記録カードには、「本時の課題・内容」「課題達成度」「学習内容の整理・振り返り」の3つを記入する欄を設けた。「本時の課題・内容」は、その授業内で取り扱う課題について端的に記す欄とし、各授業回のインデックスのような役割を果たすようにした。「課題達成度」は、本時の学習活動における知識・技能の理解度、課題の達成度等を総合して、10点満点で自己評価する欄とした。「学習内容の整理・振り返り」は、本時の学習に関わる知識等をメモしたり、本時の活動に関する振り返りを記入したりする欄とした。対面方式の授業に参加した受講生に対しては、この学習記録カードを授業開始時に配布し、本時の学習内容に関する事項を随時記録するよう指示した。

オンライン方式の授業については、Googleが提供するサービスであるスプレッドシートを使用し、ポートフォリオ入力用のフォーマットを準備した(写真2)。このフォーマットも対面方式と同様に学習記録カードと称し、記入する内容も同様とした。準備した学習記録カードは、本学で採用しているLearning Management SystemであるWebClassを通じて各受講生へ共有した。具体的には、学習記録カードをスプレッドシートで受講生の人数分作成し、それを共有するためのURLを受講生一人一人にWebClass上で共有した。WebClass上で共有する際には、受講生本人と授業者のみがそのURLを閲覧できるように設定した。

これらの学習記録カードは、受講生1人に対して、対面方式用の紙媒体のものとオンライン方式用のスプレッドシート形式のものをそれぞれ準備し、対面方式の授業に参加した





どうかを確認するために「学習記録カードは、どの程度役に立ちましたか?」という質問に対して「1. 全然役に立たなかった」から「4. とても役に立った」の4段階評定で、「学習記録カードで、以前の学習を振り返ることはできましたか?」という質問に対して「1. 全然できていない」から「4. できた」の4段階評定で回答を求めた。また、学習記録カードの良かった点や改善点について自由記述にて回答を求めた。

## 結果および考察

まず、授業形態によって学習記録カードの有用性に関する認知に差異があったかどうかを確認するために、授業形態×学習記録カードの役立ち度（「学習記録カードは、どの程度役に立ちましたか?」）および授業形態×学習記録カードによる学習の振り返り度（「学習記録カードで、以前の学習を振り返ることはできましたか?」）について、クロス集計を行い、Fisherの正確確立検定を実施した。授業形態×学習記録カードの役立ち度に関する結果を表1、授業形態×学習記録カードによる振り返り度に関する結果を表2に示す。

Fisherの正確確立検定を行ったところ、授業記録カードの役立ち度、授業記録カードによる学習の振り返り度のどちらにおいても有意な差異は認められなかった。よって、受講形態によって学習記録カードの役立ち度合いおよび学習の振り返りの出来に関する認知に差異は認められなかった。

また、受講生の回答傾向をみてみると、学習記録カードの役立ち度について「役に立った」または「とても役に立った」と回答した者は、対面方式での受講が多かった者（受講形態について「すべて対面」または「ほとんど対面」と回答した者）が92.1%，オンライン方式での受講が多かった者（受講形態について「ほとんどオンライン」または「すべてオンライン」と回答した者）が88.2%，双方の授業方式を半数程度ずつ受講した者（受講

表1 受講形態別にみた学習記録カードの役立ち度に関する人数

	どの程度役に立ったか				合計
	全然役に 立たなかった	役に 立たなかった	役に 立った	とても 役に 立った	
すべて対面	0	1	10	7	18
ほとんど対面	0	2	10	8	20
受講形態 それぞれ半分程度	0	0	10	2	12
ほとんどオンライン	0	4	16	4	24
すべてオンライン	0	0	8	2	10
合計	0	7	54	23	84

p>.05

表2 受講形態別に学習記録カードによる学習の振り返り度に関する人数

	以前の学習を振り返ることができたか				合計
	全然できていない	ほとんどできていない	ある程度できた	できた	
すべて対面	0	0	4	14	18
ほとんど対面	0	0	4	16	20
受講形態 それぞれ半分程度	0	0	4	8	12
ほとんどオンライン	1	1	13	9	24
すべてオンライン	0	0	3	7	10
合計	1	1	28	54	84

p&gt;.05

形態について「それぞれ半分程度」と回答した者が100%であり、学習の振り返り度については「できた」または「ある程度できた」と回答した者は、対面方式での受講が多かった者が100%、オンライン方式での受講が多かった者が94.1%、双方の授業方式を半数程度ずつ受講した者が100%であり、どの受講形態においても好意的な回答が多かった。

これらのことから、本研究で用いた学習記録カードは、授業方式に関わらず受講生の学びに役立つ可能性が示唆された。

次に、本研究で用いた学習記録カードの良かった点や改善点についての自由記述をもとに、授業形態によって学習記録カードの有用性や改善点に差異があるかどうかをテキストデータ分析ソフトKHCoderを用いて検討した。

まず、形態素分析を行い、各授業形態における学習記録カードの使用に関する自由記述に含まれる語とその出現回数を確認した。受講者全体で分析を行ったところ、150文が抽出され、その文の中には436語の単語が使用されていた。また、授業形態に関する質問（あなたは、ダンス1の授業をどのような形で受講しましたか？）に対して「すべて対面」または「ほとんど対面」と回答した38名（男子19名、女子19名）の受講者を対面受講者群とし、分析を行った。その結果、67文が抽出され、その文の中には274語の単語が使用されていた。さらに、授業形態に関する質問に対して「ほとんどオンライン」または「すべてオンライン」と回答した34名（男子25名、女子9名）の受講者をオンライン受講者群とし、分析を行った。その結果、62文が抽出され、その文の中には249語の単語が使用されていた。

そして、各受講形態において出現回数が多い上位15語を整理し表3に示した。受講者全体でみても「書く（55回）」「授業（45回）」「カード（39回）」「学習（37回）」「記録（34回）」などの語が出現していた。これらの語は、対面受講者群およびオンライン受講者群ともに共通して出現回数が上位であった。対面受講者とオンライン受講者の形態素をみると、15語のうち9語が共通していた。この9語は受講生全体の場合においても共通し



表3 受講タイプ別にみたポートフォリオ使用に関する形態素の出現回数

受講者全体		対面受講者		オンライン受講者	
抽出語	出現回数	抽出語	出現回数	抽出語	出現回数
書く	55	書く	30	授業	17
授業	45	カード	19	書く	16
カード	39	学習	19	記録	12
学習	37	授業	15	カード	11
記録	34	記録	13	振り返る	10
振り返る	25	内容	13	先生	10
先生	20	振り返る	12	学習	9
内容	18	学ぶ	7	特に	7
前回	15	先生	7	感想	6
見る	14	見る	6	前回	6
コメント	10	もう少し	5	コメント	5
学ぶ	10	コメント	5	ダンス	5
感想	10	前回	5	復習	5
特に	10	毎回	5	忘れる	5
ダンス	9	課題	4	見る	4

て出現していた。これらのことから、受講形態に関わらず学習記録カードに関する所感は類似している可能性があることが示唆された。

さらに、各群における形態素の関連性を確認するために、対面受講者群およびオンライン受講者群それぞれの共起ネットワークを作成した。その結果、対面受講者群(図1)、オンライン受講者群(図2)ともに7つのサブグラフが出現した。

対面受講者群において「学習」「内容」「授業」「振り返る」などで構成されるサブグラフと関連する受講生の自由記述を以下に記す。

- ・学習記録カードを書くことによって、学習した内容を振り返ることができたので、とても良かったと思います。
- ・学習カードを書くことによって、先週何をしたか?やどんな動きがあったか?などを振り返ることができ、ダンスを創作するときにとっても役に立ちました。
- ・先週は何を学んだかを知ることができて、今(最後の授業のまとめの際に)こうして全体を振り返る時も学習記録カードを見ればわかるので、とても便利だと思いました。

オンライン受講者群においても「学習」「授業」「振り返る」などの類似する形態素から構成されるサブグラフが認められた。これらに関連する受講生の自由記述を以下に記す。

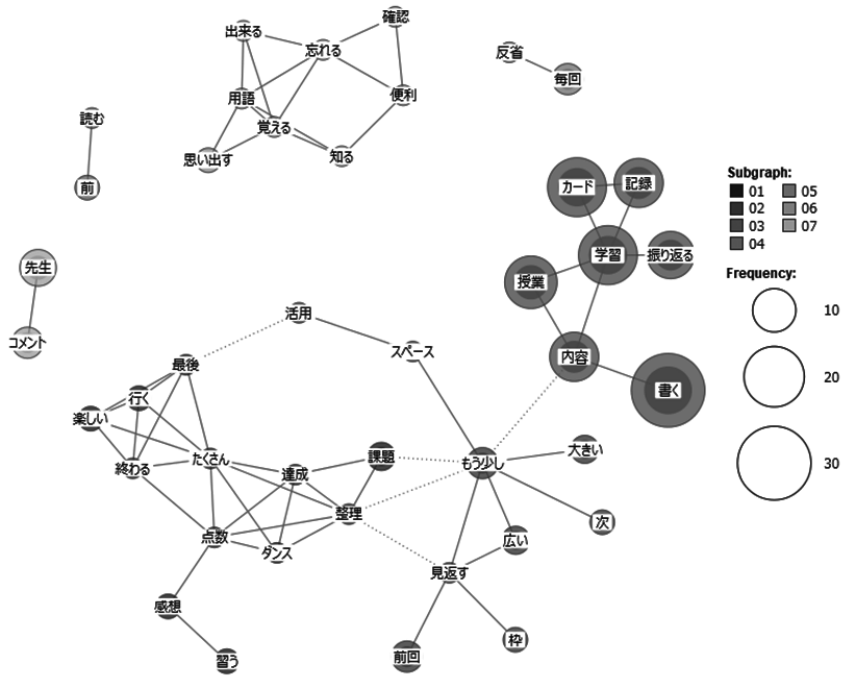


図1 対面受講群における共起ネットワーク

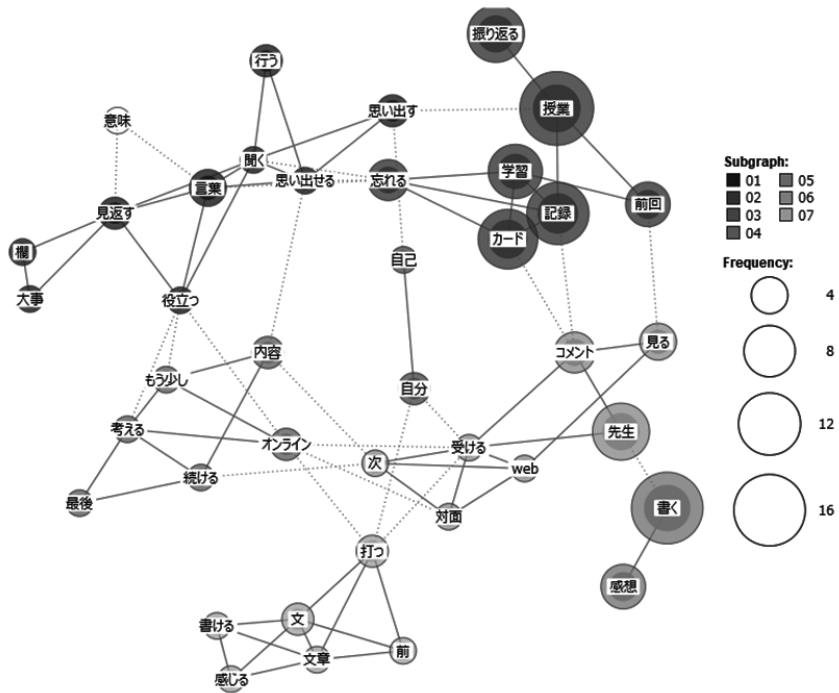


図2 オンライン受講群における共起ネットワーク

- ・ どういった授業をしてきたのかを振り返れるし、それだけでなく自己採点もしているのでどんな感じだったかも思い出しやすいといった点で学習記録カードはとても有効だったと思います。
- ・ 毎回の授業で振り返りできたのはとても良かったと思いました。そのおかげで創作ダンスをする時にとっても役立ちました。

また、「思い出す」「便利(役立つ)」といった形態素が含まれるサブグラフが双方の受講形態に出現していたことから、それらに関わる記述を確認してみたところ、下記のような記述が得られた。

〈対面受講者〉

- ・ 授業で習った用語などを覚えても意味を忘れてしまった時などに学習記録カードを見て思い出すことができ良かった。
- ・ 次の回の時に、前回のを見直して、思い出したりできたので、私は学習記録カードがあっよかったと思いました。
- ・ その日、自分が何をしたかを書くことで、思い出すことができる。
- ・ 前回の内容など確認することができて、学習記録カードがあっよかったと思います。

〈オンライン受講者〉

- ・ 前回の授業何やったけ?と思った時でも自分の書いた感想などを見返せば何をやったのかだいたい思い出すことができたので良かったと思いました。
- ・ この授業を通して学んだ言葉などは、ほとんどが初めて聞くことで忘れてしまうこともあったがその時に学習記録カードを見返すことによって、その言葉を思い出せたり、どのようなことを行ったかも思い出すことができとても役に立った。
- ・ カノンやシンメトリーなど聞きなれない言葉を書き残すことができ、まとめることができるので、忘れたときなどに見返すことができるため、とても役立ったし良かったと思います。

これらの記述から、受講生にとって学習記録カードは授業内容を振り返ったり、過去に学習した内容や知識を思い出したりするうえで有効な手段として機能しており、その機能

は受講形態の違いに関わらず作用していることがうかがえる。

次に、オンライン受講者群の共起ネットワーク内に出現した「先生」「コメント」などで構成されたサブグラフに関連する記述を確認してみたところ、下記のような意見が見受けられた。

- ・先生のコメントが書いてあり、次の授業に生かそうと思えた。対面で受けても先生がwebの記録カードに打ち込んでくれていたので振り返れてよかったです。webの記録カードでは先生が赤色にしてくれていたり見やすく良かったです。
- ・個人個人に学習記録カードがあったのはすごくありがたいと思いました。先生がコメントしてくれるので書く側もしっかり書かないと！と思うのでいいと思います。
- ・前回の授業の内容や先生からのコメントを見て「次回の授業はこうしよう」と思えるのでとても使いやすかったです。

類似した意見は、対面受講者群においても確認されたがサブグラフとして出現しなかったことから、授業者からのコメントは、オンライン受講者にとっては印象的なものだったのかもしれない。オンライン方式の授業では、グループ活動を実施する際にオンライン会議ツールに搭載されているブレイクアウトセッションという機能を用いてグルーピングし、そのグループ（セッション）内で活動する方法を採用していた。このブレイクアウトセッションは機能の特性上、他グループの活動状況を確認するためには、自身でグループ（セッション）を移動しなければならない。対面方式の授業であれば、受講生は同じ空間で活動をするため、他グループの活動の様子を声や目視、雰囲気などである程度自然と察知することができるが、オンライン方式の授業の場合は、それを確認するために受講者自身が積極的な行動を起こさなければならず、その障壁は大きいと考えられる。また、授業者も同様に各グループ（セッション）に移動しない限り、そのグループの活動を確認することはできないため、各グループの様子を同時に把握し、助言を与えたりすることは困難である。これらのことから、授業者と受講者あるいは受講者と受講者との間のやりとりは、対面方式の授業と比較してオンライン方式の授業の方が少なくなる、もしくは迅速さに欠ける場合が多い。これらのことを踏まえると、オンライン方式で授業に参加していた受講生にとっては、学習記録カード上に記載される授業者からのコメントや印象的なコメントの文字色を変更するといったリアクションは、授業者とコミュニケーションをとる貴重な場として位置付けられていたのかもしれない。

ポートフォリオは、教員とのコミュニケーションの促進効果がある（李，2018；吉重，

2016)とされているが、その効果はオンライン方式の授業の受講者に対しては、さらに大きくなる可能性があるかもしれない。ただし、本研究においては、それを実証するためのデータ収集や分析は、実施していないため詳しく言及することはできない。今後、オンライン方式の授業がどの程度普及(または衰退)するかは見当がつかないが、オンラインでのコミュニケーションツールの普及は著しいことから、この点についてさらに検討を進めることは意義深いことかもしれない。

一方、対面受講者群において出現した「点数」「達成」といったサブグラフは、オンライン受講者群には、存在しなかった。このサブグラフに関わる記述を確認したところ下記のような意見が見受けられた。

- ・授業終わりに点数をつけて、感想を書ける点良かったですと思います。
- ・課題達成度の点数を書くところがあるのは、人より頑張ろうと思うことができるので、とても良いと思いました。
- ・課題達成の欄があることで、授業ごとに自分の動きを数字として評価できるのは、とてもいいと思いました。

類似した意見は、オンライン受講者群でも確認されたがサブグラフとして出現しなかったことから、授業の振り返りに際して、自己評価で点数をつけるという行為は、オンライン受講者にとっては印象的なものだったのかもしれない。特に「課題達成度の点数を書くところがあるのは、人より頑張ろうと思うことができるので、とても良いと思いました。」という意見から推測すると、対面方式の授業においては、自己の達成度やできばえを他者と比較する機会が多かったことが起因している可能性と考えられる。先述したように対面方式の授業は、同一空間で活動を実施するため他者または他のグループの様子を声や目視、雰囲気などで察することができる。例えば、ある課題に沿ったダンスを創作する活動を実施している場面では、各グループの完成品を観るだけでなく、その創作過程も確認することができる。このことから、対面受講者は他者または他グループと比較して自身の活動がどの程度の出来栄であったかを評価していた可能性がある。一方、オンライン受講者は、先述したようにグループ活動中に他のグループの様子を確認することが困難であり、ほとんどの受講生が他のグループの活動成果(創作したダンスの発表等)のみを確認することとなる。これらのことから、課題達成度に関する自己評価に関するサブグラフが対面受講者群にのみ形成されたと考えられる。

また、このサブグラフは幅広い形態素で構成されていたことから、他の語についても受

講生の記述を確認していった結果、「整理」に関する記述に特徴がみられたため、その記述を以下に記す。

- ・内容の整理や振り返りを書くところがもう少し広い方が書きやすいし、先生のコメントも見やすくなると思いました。
- ・「学習内容の整理・振り返り」ののところには、たくさん書くことがあったり、感想を書いたりするけれど、書くところが少なかったです。

類似した意見が「もう少し」「広い」「スペース」などで構成されるサブグラフでも確認された。

- ・授業内容を書くときは、少し枠が足りない時があったので、もう少し広い方が書きやすいと思いました。
- ・たぶん、書くスペースをもう少し広くしても、みんないっぱい書いてくれると思いますよ。枠をはみ出さないように内容を絞ってた人もいました。

これらの意見は、オンライン受講者群には見受けられない対面受講者群特有のものであった。対面方式の授業で使用した学習記録カードは、写真1に示した通り、紙媒体の片面刷りであった。用紙の大きさはA4を使用し、これまで学習した内容を一目で振り返ることができるように構成したことから、記入スペースはそれほど大きくなかった。一方、オンライン方式の授業で使用した学習記録カードは、スプレッドシートを使用しているため、各記入欄はセルの大きさを各自で変更できる。そのため、いくらでも記入スペースを確保することができることから、オンライン受講者群内ではこのような意見が見受けられなかったといえる。

これらの意見は、対面方式の授業で使用する学習記録カードを改善する上での貴重な意見であるといえることから、今後の授業で活かしていきたいが、一方でポータルフォリオには、授業内容の重要事項を簡潔に要約する資質・能力の向上に寄与する（堀，2009）といえることから、安易に記入スペースを広げればよいわけではない。「枠をはみ出さないように内容を絞っていた人もいました。」という意見が見受けられたことから、本研究で用いた紙媒体の学習記録カードは、受講生の授業内容を要約することに関わる資質・能力の向上に寄与していた可能性がまったくないとは言い切れない。記述量に関して受講生が満足し、かつ授業内容の要約能力の養成も期待できる記入スペースはどの程度なのかを今

後検証しながら、学習記録カードの改善を行っていきたい。

また、学習記録カードの改善点について、オンライン受講者群においても「文章」「打つ」などの形態素から構成されるサブグラフに関連する意見から抽出することができたので、以下に記す。

- ・文を打ち終わった後に、もう一度文章が打ちたくなかった時に、前に書いた文が全部消えてしまうことが不満に思いました。それ以外は見やすく、復習もできました。
- ・リモートの時は落ち着いて文章が書けたけれど、対面に参加した時にあまり文が書けなくて、私は振り返りがあまりできなかつたなと感じました。

オンライン受講者群においては、学習記録カードのフォーマットに関する課題と記入時間に関する課題に関する記述が見受けられた。

オンライン受講者向けに学習記録カードを作成する際に用いたツールであるスプレッドシートは、Microsoftが提供しているOfficeExcelと類似したツールであり、セルが均等に配列されていることから学習記録カードの記入欄を表形式で作成する際に利便性がよかったが、本来は表計算用のツールであることから、操作方法によっては、記入した文章が一括削除されてしまうこともある。また、受講生の多くはスプレッドシートを使用するのが初めてであった。仕様はMicrosoftのOfficeExcelと類似していることから、使用することに対してあまり抵抗感はない様子であったが、初めて使用するツールであったため、使用方法に関して不慣れな部分があったことが予想される。これらのことから、スプレッドシートは、学習記録カード作成には不向きなツールであったかもしれない。この点については、大学生が抵抗なく使用できる、文書作成に特化したツールを使用するなどの改善を試みる必要があるといえる。

## 文 献

- 立田夏子(2017) 教養教育英語科目におけるポートフォリオの活用：ヨーロッパ言語ポートフォリオの応用可能性. 弘前大学教養教育開発実践ジャーナル, 1, 31-41.
- 堀哲夫(2009) 学習履歴を中心にした大学の授業改善に関する研究－OPPAを中心にして－. 教育実践学研究：山梨大学教育人間科学部附属教育実践総合センター研究紀要, 14, 64-71.
- 松井かおり(2021) 英語授業におけるポートフォリオ評価の活用：学生の学習履歴をきめ細やかに見取るために. 朝日大学保健医療学部健康スポーツ科学科紀要, 4, 38-45.
- 松本葉子(2018) 相談援助実習指導におけるポートフォリオ型ワークシートの導入とその効果.

田園調布学園大学紀要, 13, 101-113.

宮原淳 (2021) コロナ禍の遠隔授業における主体的な学び－TOEIC® 対策授業アンケートの計量テキスト分析から－. 岐阜聖徳学園大学教育実践科学研究センター紀要, 20, 19-26.

村石理恵子・土井晶子 (2021) 保育者養成課程における授業プログラムの協働：学修ポートフォリオを活用して. 東京女子体育大学東京女子体育短期大学紀要, 56, 111-126.

文部科学省中央教育審議会 (2008) 学士課程教育の構築に向けて (答申)

[https://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/1217067.htm](https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/1217067.htm) (2021年11月8日閲覧)

山田祥之 (2019) 電気通信大学のキャリア教育授業における e ポートフォリオシステム活用の実例報告. 電気通信大学紀要, 31 (1), 1-7.

吉重美紀 (2016) 授業におけるポートフォリオの活用. 鹿屋体育大学学術研究紀要, 52, 25-33.

李熙卿 (2018) 韓国語授業におけるポートフォリオの活用－学習者参加型授業をめざして－. 久留米大学外国語教育研究所紀要, 25, 19-43.